\学問の魅力/や高校との\学びのつながり/をひもとく

学びのみちしるべ 第9回

取材・文／いのうえりえ
イラスト／桔川 伸

大学での学びの中身と、その学問が社会でどう役立つのかを大学の先生が解説。進路選択のみちしるべとなるよう、高校での学びがその学問にどうつながるのかもお聞きしました。

環境政策学

［お聞きした先生］» 東邦大学 理学部 生命圏環境科学科 柴田裕希 准教授

Q この学問の内容、面白さは？

A 環境問題と持続可能な社会づくりという課題の解決策をサイエンスの立場から探究する

気候変動、ヒートアイランド現象など、私たち人類は様々な地球環境問題に直面しています。日本は1950年代からの高度経済成長期に、悲惨な4大公害病を経験しましたが、現在も日本だけでなく世界各地でさまざまな開発事業が行われ、依然として多くの自然環境、貴重な生物、生態系が失われ続けています。これらの問題の原因や解決策をサイエンスの立場から探求し、行政計画や公共事業の合意形成などへ結びつけていくのが環境政策です。

より良い環境づくりのために、豊かな自然を守ることは大事ですが、そればかりに力を入れすぎると経済活動が制限されてしまうといった懸念も出てきます。経済の発展と環境保全をどうやって両立させていくか、さまざまな考え方の人がいる中でどのように折り合いをつけ、合意を形成し、政策を実施していくか。そこで注目されているのが環境アセスメントです。アセスメントとは影響評価という意味。開発事業の開始前に、開発によってどのような影響が出るのか、最初に科学的評価を行うことです。

例えば、東日本大震災以降、原発事故の影響で再生可能エネルギーが注目され、太陽光発電や風力発電が増えています。太陽光発電については長野県、山梨県に多く建設されているのですが、それ故に問題も起きています。この両県は風光明媚な観光地ですが、いきなり森林が伐採され、太陽光パネルがずらりと並ぶことにより、自然景観を壊すことになります。しかも、太陽光パネルは山の南側の斜面に設置され、そこに生えている木々を根っこから伐採するので大雨が降ったりすると崩れやすくなり、土砂災害を招くことにもなってしまいます。

そうした環境破壊の事態を招かないために実施するのが環境アセスメントです。どのような発電所を作るのか、作ったことによってどんな景観になるのか、土砂災害のリスクはどれくらい増えるのかを事前に評価するとともに、その地域にどのような大切な環境があり、生態系に影響が出ないためにどんな工夫が必要なのか、何より住民の方々はどのように思っているのかなどを調査していきます。環境、経済、社会がバランス良いカタチで持続可能な地域や社会を実現していくうえでも今後ますます環境アセスメントの役割が大事になってきます。

風力発電も太陽光発電と同じ。風車を風が通る場所に設置するが、そこは渡り鳥の通り道でもあるので、事前に鳥の調査を実施し、渡り鳥に影響が出ない手立てを考える。

Q 社会でどのように役立つ？

A さまざまな価値観の中で合意形成していく力はどんなビジネスでも必ず役に立つはず

国連が定めた世界共通の目標「SDGs」を聞いたことがあるでしょうか。Sustainable Development Goalsの略で、「持続可能な開発目標」という意味です。例えば、貧困や格差の問題、気候変動対策など途上国だけでなく先進国も含めてすべての国に適用される普遍的な目標です。SDGsはまさに世界の環境政策の中心にあるものであり、同時にすべてのビジネスにおいて今、非常に高い水準で、持続可能性を考慮することが求められています。

そんな時代だからこそ、環境政策学の中でサイエンスの立場から、社会のさまざまな問題の解決の糸口を考えたり、そこから合意形成にもって行くための手法を学んだことは、どんな企業に就職しても必ず役立つはずです。ちなみに環境政策学を学んだ卒業生には、都市開発や環境づくりに関わる仕事や、公務員となり、国や地域の環境保全に従事する人もいます。

Q 高校の科目とのつながりは？

A 高校で学ぶ理系科目は総動員。倫理や現代社会など社会科科目も関係

環境問題は非常に幅広いので理系科目はすべて関わってきます。例えば、大気はどう動くかといった気候変動は物理、土壌は地学、自然の生態系、動植物に関しては生物といった具合につながっているので、理系科目はまんべんなく勉強しておいてください。そうした理系の知識や技術を使って社会をより良い環境にしていくのが環境政策。ですから、現代社会、倫理など社会科科目も関わってきます。さらに話し合いの機会も多くなります。間違っているかどうかを気にせず、考えていることをしっかり伝える力も、身につけておくと大学だけでなく、社会へ出てからも役立つと思うので、高校でのディベートの時間も大切にしてほしいなと思います。

私自身、地方に育ち、開発によって自然が失われるのを見ていてこれでいいのかなという思いが子ども心にありました。身の回りの自然環境などを今までより少し気にかけてみてください。まさにそれが環境政策の第一歩です。

国際関係学

［お聞きした先生］» 亜細亜大学 国際関係学部国際関係学科 秋月弘子教授

Q この学問の内容、面白さは？

A 国と国との付き合い方を学ぶのが国際関係学。私たちの日常にはすべて国際法が関わっている

国際関係学とは国と国との交わり方、付き合い方を学ぶ学問です。異なる文化や歴史背景をもった国家と国家が理解し合うためには何が必要なのか、平和のために何ができるのか、また、地球環境を守りながら世界が経済発展を遂げていくためにはどう協力し合うべきかを考えるため、国際法、国際政治、国際経済、国際協力などの科目を学びます。ちなみに宗教、文化といった視点から国際関係を学ぶ学科もあります。本学であれば、多文化コミュニケーション学科がそれに当たります。

その中で私の専門は国際法になります。国内には立法府がありますが、国際社会にはないので、国家間でそのつどルールを決めていきます。例えば、戦争をなくしたいと多くの国が考えれば、戦争を禁止する条約を取り決める、地球の温暖化を食い止めたいと思えば、CO_2排出を制限する、といった具合にです。宇宙、空、陸、海などにもこうした国家間のさまざまなルールが細かく設けられています。実際、海外に手紙を出して、相手に届くのも国家間でルールが決められているからです。しかも、国内の法律よりも圧倒的に国際法は守られているんです。戦争をしてはいけないという条約があっても、時にはアメリカみたいにそれを破る国が出てくる。でも、他の200カ国近くが「戦争はしない」ことを守っているので、アメリカのように守らない国が目立つわけです。こんな風に、各国家は自制的で自分たちで決めたルールを大事にしています。そうでないとルールを設ける意味がないことをわかっているからです。

もともと私は学生時代から、国際平和に貢献したいという思いがあり、国連で働いていたこともあったので、国際法の中でも国連を主軸にした法の問題を研究してきました。国連ではどのように法を作っているのか、難民援助や開発援助のため、具体的にどんなことをしているのか、などです。

その関連で現在は、国連女性差別撤廃委員会（CEDAW）委員となり、女性の人権問題の研究も行っています。調査してみると、ひと言で女性差別といっても国ごとに違う課題があることに驚かされます。例えば、イスラムの国の中には、女性が外国人と結婚した場合、子どもが自分と同じ国籍がとれない国があるんです。男性が外国人と結婚しても、子どもは自分と同じ国籍をとれるのに。

アフリカでは、国家として男女平等の法律があるのに、地方によっては、法より首長の権威の方が強く、例えば、離婚などの場合でも伝統的な価値観に基づき一方的に女性が悪いと追放されてしまうこともあるのです。そういった世界各国の事情を知るだけでなく、それをどう解決すればいいのかを考え、男女差別撤廃に貢献できるのは非常にやりがいのあることです。

Q 社会でどのように役立つ？

A 日々変わる世界情勢を見つめることで育んだ視野の広さはどんな仕事にも役立つ

研究者にならなくても、世界へ出て活躍しなくても、こうした国際関係学の知識があること、また、普段の生活の中で、自然に日々の世界情勢を見つめる眼差しをもっていることは、どんな仕事に就いても十分役に立ちます。

卒業後は観光や流通、航空関係へ就職する人が多いですが、国際協力機構や国連で活躍する人も。卒業生たちからは「意外に世界のことを知らない人が多い。でも、自分たちは知っているので、それが社会人として自信になっている」という声をよく聞きます。

Q 高校の科目とのつながりは？

A 18世紀以降の世界史と政治経済。英語は楽しみながら耳を慣らしておく

国際関係の背景を知るうえで世界史は必須。そこにいたるまでの歴史を知っておく必要があるからです。国際関係を学びたいと思っていて世界史をとっていない人は、18世紀以降の部分だけでいいので、マンガでわかる世界史などを読んでおきましょう。政治経済では、特に政治の部分で、そして経済的な面で、日本がどの国と関わりがあるのかを知っておくと良いです。

私自身、高校時代、世界史の中では近現代史が好きでした。面白いものだなと思ったのは、別ものだと思っていた日本史と世界史が、大学へ入ってから国際関係史でつながったこと。世界史の中に日本が入ってきたという感じがしたんです。高校時代に社会が好きではなかったとしても、大学では全然違って見えることも多いので、ぜひ社会が苦手な人にも国際関係学に目を向けてもらいたいですね。

オススメBOOK

『私の仕事　国連難民高等弁務官の10年と平和の構築 』（緒方貞子著 朝日文庫、2017年）。国連職員時代、常に目標としていた緒方さんの本。